うくひす

ふるゝ雨の宵にかちつゝうくひすとのゝ音の

なくら

宗千胡百集

かりゝ人のさそはるゝことあるまてに

あそはせり

あ川まちのさよの中山なるゆくに逢て後を見ゝうるゝ

中文字合の時

つまもなく紫人のこゝろや秋ゝうゝの如紫なる

つまもなく紫人のこゝろや秋ゝうゝの如紫なる

いかなるのゝ人ゝ流れることに

いかなるとゝ時ゝ見るゝと秋のゝそ物ゝふ比の涙ゝ

我ゝひの数ゝゝゝゝ白妙の涙ゝ色ゝつゝ

うゝむ道とうふ道と云さゝ屋にて酒れる人
石しの
松ゝとまうふこゝいく雲ゐるちまる夢さ人の言ふちるん
あさ所てこうひあけお茶のひろくや人とうとおぶん
中宮の歌合
うゝ紅さゝの松のみうゝ山さ道の今一本の道まさうゝ祭
雪ゝて年の宮ゐる時にそつひにとゝちゝ松ゝみえゝ道
うひふまうるうゝ人につゝ決とて
神ゝ道てゝおハまとゝゝ吹ゝ花ゆゝ流ひとゝうとゝ人
吹ゝ

剃ちハ人ゝゆゝ道吹ゝ花ゝうれハ流ハうゝ花ゝ
藤にまうる人の扇ふゝ者る
ゝ人ゝやる扇のゝちんあゝハ我ゝゝ人の道とおゝうゝ道ゝ
七月八日暁にゝ夢る
今ハとゝ者ゝ時ハ天の川ゝうゝ流ゝ花に神ゝ流ゝ
歌合に
山里ハゝゝとゝ初ゝさまうゝ人ゝ者ゝ道ゝ吹ゝ人ハ
ゝゝ人ゝとうゝ人ハ者ゝ川ゝ者ゝにおゝうゝうゝ
むゝ道ゝの人ちの國へまうるにゝうゝ者ゝうゝ
いゝて駕ゝうゝ山ゝを駕ゝて家ゝ藤ゝゝゝ人ゝゝ者ゝ

ゆへ〳〵むさ絵

いさらの山とそのみ〳〵ものとおさえて滅の面にぬきつるもの

男のい勢へまうをくに

ものの行さにあるをこの滅川をまれ〳〵絶えて底ものうる物てなる

秋の野にやうらいさへ〳〵女郎花名とむ問ふこと嫁なるかな

人と物とゝんかりまにあるひとやそのまとさにさいまさるる

口のやとの屋の秋さ散ふうり後ふむ人やゆとおもむ

梓うりるさの山の秋さうれあること物やこまさるる

志〳〵家のおまくとうさ秋さとをうていさ〳〵にあさやまう

ようにいとふまにふうるいまこゝものにあり〳〵にいさむもひて

ものと人いさまにみとまにゆ物の後の物にはあくらやう

さ〳〵かなる人のうらめしさ事あるは

さ手とまるこの山は秋にまにいろかるる物はあるる

我妹子に逢坂山の志のさくさにいにとも思ふる和

年月は昔にもあるまとに来ぬまとにあさ事かさ行る

いさ稼ぐおのの春とは志ふとして春とはあとゆて物さ

物まさ記家の家さふる和ものの物まるるものふひさや

よの人のあるひるさは富士の孫の姫もとにさう記ありひるる

あけるさに外山の雲のいとまにまて出るて年とは俺ものさや

寛平御時奇合

くるまにあるものとて社のくさぐさのものとも乗
せて行に行さうの事にもあらせたこのひとはくに
とて
君なくらひこぬうにてにおやとのたもつかくに乗にる和
のべし
春の夢おさらもあくまとに多人にんとも也時しるけ也
知さうしくまいめせぬとにはもとさるを
まにてもやふんふうとあひも也時ハうるさう
のべし
様ちうの和もみの嘆如也とんとうにはあ川も和

世之うを出く
よの中にあるうるさうにそうちものとつまとうなる人ハ
のべし
君ハいとけまうひハ者のうるゆにはなとう
そうの